はらざるもの泰西にありてはクロンウエル、東洋にありては荊公王安石なり」と感激的文字を羅列して、大いに王安石を辯明したが、あまりに感情的に、はしり、かうした態度が愼重な歴史家のとらざるところであることは申す迄もない。

同君は數ヶ月間毎夜二三時間づゝ規則的に執筆されたそうでその着實さにはいつもながら驚歎するが、そのために同君もおそれてゐた議論の重複がないこともない。しかしそれも、取るに足らぬ程の小さい事柄で本書の價値は微動だにもしないであらう。

（支那歴史地理叢書　第十一　昭和十六年三月冨山房發行、壹圓貳拾錢、四六版一七八頁）　（荒木敏一）

興京二道河子　舊老城

建國大學研究院刊

本書は滿洲國建國大學研究院歴史報告の第一として刊行されたもので、滿洲に於ける清朝初期の歴史地理の實地調査報告である。その内容は本調査を行ふに當りその手引の文献となつた申忠一書啓の研究編と實地踏査の報告の部に分れて居る。今その調査の動機目的と略述してみると、清の太祖が兵を起して新に國を興すに至つて自己の根城を築いた。やがて彼の勢力が増大し國が發展するにつれてその城の性質が變つて來、始めは單に軍事的意味合の要害の城であつたのが國力の發展人口の膨脹に伴つて漸時政治都市としての樣相を帶びて來る。そして頻々たる遷都の事が餘儀なくされた。彼が後金國最後の首都となつた瀋陽城（奉天）に住む迄四度居を移した。その最初のものは清朝入關後の記錄によつて撫順の東に當る興京老城といひならはされて居たが、實際はその前にもう一つ根城があつたので、それが本報告に出てくる興京の近くの二道河子の山城であつた、といふのである。この二道河子の山城に關する之迄の記錄はその記述甚だ簡單で、果して居城であつたのか、又その地が現在の何處に當るか不明のまゝに專門史家に課せられた問題として今日に至つたのである。所がはからずも近年この山城に關する詳細なる根本史料が出て始めてその全貌が明になつた。その史料といふのが本報告所載の申忠一書啓である。この記錄は、清の太祖がこの二道河子の城に據つて居る時分曆の上では明の萬曆二十四年朝鮮から敵情視察の爲に派遣された申忠一がその道程、太祖の居城の構造、太祖の幕庭の情況、滿洲軍の動勢、滿洲人の生活等自己の見聞を記述し且圖示したものである。萬曆の末年に出た李民煥の建州聞見錄、柵中目錄と共にこの種のものの白眉をなすものである。この書が發見されるや、故稻葉博士の手によつて弘く學界に喧傳されるに至つた。本報告ではこの手記に基いて問題の二道河子城を確める事且その遺跡と覺しきものを得た後、その實地踏査の結果が申忠一の報告と果して合致するや否やを調査するのが目的であつた。即ち文献の指示に從つて遺蹟を調査しその結果によつて又文献の確さを檢討しようといふのである。從來清初入關前の史實を明にする爲には朝鮮側の史料は不可缺とされて居る。そしてヌルハチ出生以前の史實

は特に然りといはれる。然し乍ら外國史料である故にその正確さが疑はれる向もあるが實際は意外に正確なものであるといふ事は之又定評のある所であつた。この度の調査はそれを更に實地に於いて確めようといふ譯であり、その結果は滿洲史研究の分野に新なる見解が挿入されるに至つた。今調査の内容を窺ふに、全體の結構は大體四篇に分れ、その内興京二道河子舊老城訪問記、申忠一圖錄解說の二篇は稻葉博士の手になり、史料と實地との比較檢討がものされ、第三篇に書啓及び圖錄の全文が載せられてあり、四篇の二道河子舊老城概報告によつて遺蹟の實際情況が報告されて居る。そして我々はその調査の目的が大體達成されて居る事を知り、實地によつて裏付けされた史料の記述は現實感を伴つて我々に話しかけてくる事を感ずるであらう。方に百聞は一見に如かずである。そしてそこに幾多重要な意義が見出される。實際この種の企てといふものは國史にあつては日常茶飯事の事であるが、外國史の領域に於て然も我が國人の手によつて行はれたといふ事は特筆されねばならぬ。滿洲史の研究は近時目覺しく進展したが今や國史並に根本的な研究法が行はれる迄に到達し得た樣である。かくて一段と高い正確さが得られることになる譯で、これは申々の進歩である。かく考へる時、本報告が現地の大學の研究報告の最初のものとして刊行された事は誠に意義深きものがある。この調査は滿洲史實の闡明が第一の目的であつたが副産物として更に價値多きものが見出される。例へば二道河子山城の構造に於いて女眞民族特有の形式が見られる事又これが我國武家時代の築城の樣式の對比の事も考へられ、英傑ヌルハチ汗の作つた城といふ史的興味を離れて民族の生活形態の變遷、比較等の類型的立場から新なる興味が齎される、滿洲の地にこの種の遺蹟遺物が尙數多存在して居る。話は違ふが從來死語と思はれた滿洲語及同系統の言語を繰つる民族は尙現地に生活して居る。かういつた程のものの徹底的の調査は古來からの習慣傳統が未だ失はれて居ない今日早速にも着手さるべき事業の樣である。この方面のものとして今迄にシロコゴロフの業蹟、凌純聲の勞作以外は誠に寥々たるものがあり、本邦人の手にかゝつたものは殆ど見當らない。かく思ふ時現地の大學の使命は誠に重大である。今本報告を手にしてそれ等の實現される時の間近なるを豫感し喜びに堪へない。今日流行の未開族の研究もこゝに於て一役買はるべく、徒に紅毛人の業蹟にのみその所産を仰ぐべきでもなからう。それからこれは餘事であるがこの報告は滿洲史研究の權威稻葉博士の最後の勞作となつた事である。我々の尊敬する大先達がその死の直前迄研究に熱情を傾けられ後進を誘導された眞摯さは誠に頭が下がるものがある。今博士を失つて、この學問の領域に於ける索漠さが一入感ぜられるものやあながち筆者一人ではあるまい。謹んで故博士の偉大さをしのぶものである。（新四六倍判、康德六年十二月發行）

〔三田村泰助〕

ペルシア宗教思想

足利惇氏著